

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ゆにば		
○保護者評価実施期間	2024年10月27日		2024年11月22日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	47	(回答者数) 34
○従業者評価実施期間	2024年11月20日		2024年12月28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	9	(回答者数) 9
○事業者向け自己評価表作成日	2025年2月26日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	学校から出された宿題は、スタッフが支援しながら取り組めるよう対応しています。基礎学力の定着を目指し、無理なく学習できる環境を整えることで、自信を持って学習に向き合えるようサポートしています。また、学習への苦手意識を軽減するため、時には答えを示しながら「できた!」という達成感を積み重ねることを大切にしています。	視覚的な教材やタブレット学習も取り入れています。また、集中が続きにくいお子さまに対しては、短時間で区切った学習や、学習と遊びを組み合わせる工夫を取り入れ、負担を軽減しながら学ぶ意欲を引き出しています。宿題のサポートについても、答えを教えることがありつつも、自分で考える力を養うよう促し、成功体験を積み重ねられるよう努めています。	保護者との連携を深め、ご家庭での学習習慣の定着を支援するため、情報提供やアドバイスを行っています。定期的な面談を通じてお子さまの成長を確認しながら、より効果的な学習支援を進めていきます。
2	お子さま同士が関わりながら楽しめる遊びを取り入れることで、他者とのやり取りに対する抵抗感を減らし、言葉のやりとりや非言語的な表現を学ぶ機会を提供しています。また、一人ひとりの性格やペースに配慮しながら、無理なく参加できるように支援することで、「人と関わる楽しさ」を実感し、自信を持ってコミュニケーションを取れるよう促しています。	最初はスタッフとの関わりを通じて信頼関係を築き、スタッフが他児を誘い込んでお子さまとの関わる人数が増えていくよう支援しています。また、相手との適切な距離感を身につけられるよう、「貸して」「入れて」「ごめんね」などの言葉を使う場面で声をかけ、相手の気持ちを考える力を育てています。	より多様な遊びのプログラムを導入し、コミュニケーションの幅を広げる取り組みを進めていきます。また、今後も一層遊びを通じて言葉のやり取りや感情表現のスキルを実践的に身につける機会を提供します。

3	<p>工作活動を通じて指先の器用さを養い、創造力や集中力の向上を促しています。はさみ、折り紙、粘土など多様な素材を活用し、楽しみながら手指の発達を支援します。作品を完成させる達成感は自己肯定感を育み、自信につながります。また、一人ひとりに合った課題を設定し、「できた!」という喜びを積み重ねて、学習や日常生活への意欲向上を目指しています。</p>	<p>お子さまの発達段階や興味に応じた工作活動を取り入れ、無理なく楽しめる環境を整えています。例えば、細かい作業が苦手なお子さまには、シール貼りやちぎり絵といった簡単な動作から始め、徐々に難易度を上げながら指先の使い方を学べるよう工夫しています。また、季節ごとのテーマを取り入れることで、興味を引きながら継続的に取り組めるようにしています。</p>	<p>今後は、より多様な素材や技法を取り入れ、工作活動の幅を広げていきたいと考えています。また、創作活動を通じてお子さまの個性や感性を伸ばせるよう、作品を展示する機会を増やし、自分の作品を発表する楽しさを味わえる場を提供していく予定です。</p>
---	---	--	---

	<p>事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること</p>	<p>事業所として考えている課題の要因等</p>	<p>改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等</p>
1	<p>お子さまの支援に当たって、支援活動を行いながら、その合間に支援記録を取っている。支援終了後にも、その日の活動内容やお子さまの反応、進捗状況などを記録し、次回の支援に活かせるようしている。今後はさらに支援記録を充実させたいと考えており、限られた時間の中で課題に対する取り組みの進展などをより細かく反映させたい。</p>	<p>事業所の課題として、動きの多いお子さまにスタッフが関わらなければならないため、本読みしているお子さまへの支援が手薄になることがあります。また、支援記録をタブレットで入力する際に手間取ることや、アセスメントツールが十分に活用されていない点も課題です。これらの要因に対して、記録作成の効率化、アセスメントツールの活用促進が必要と考えています。</p>	<p>限られた時間の中で効率的に支援記録を充実させるため、スタッフの聞き取り内容を文字起こしして記録に反映する方法を検討しています。具体的には、アプリによる自動文字起こしやAI機能を活用し、記録の清書を行うことで作業負担を軽減できる方策がないか、試行錯誤的に試してみたいと考えています。</p>
2	<p>工作活動を円滑に進めるためには、スタッフが事前に作り方を把握しておくことが重要です。しかし、非常勤スタッフは曜日ごとに入れ替わるため、全員に必要な情報が行き渡らないことがあります。その結果、活動の進行にばらつきが生じることがあります。全員が集まる機会が少ない中で、曜日ごとの情報共有を強化し、スムーズな連携を図る工夫が求められています。</p>	<p>支援前の打ち合わせ時間を確保しているものの、その中に工作に関する準備時間を組み入れるのは難しい状況です。工作の作り方を練習する機会も不定期であるため、固定の勤務時間内に組み込むことが困難です。また、季節に応じたアイデアが随時出てくるため、計画的に準備を進める時間的な余裕が十分に確保できていないことも課題となっています。</p>	<p>季節ごとの工作をスムーズに進めるため、その季節になる前にアイデアを出し合い、準備に十分な時間を確保することが考えられます。また、支援前の打ち合わせ時間を活用し、少しずつ作り方の練習を行う機会を設けることや、複数の工作方案がまとまった段階でスタッフが集まる時間を確保し、作り方の確認や必要な準備を共有することが考えられます。</p>
3	<p>スタッフの年齢層に偏りがあり、特に若く活動的なスタッフが少ないことが課題として挙げられます。子どもたちの支援においては、見守りだけでなく、一緒に遊びながら積極的に関わることを求められる場面も多くあります。そのため、子どもたちと体を動かして遊ぶことができるスタッフの確保が重要と考えられます。</p>	<p>ベテランスタッフが安定した支援を継続できていることは、事業所にとって大きな強みです。長年の経験を活かし、子どもたち一人ひとりに寄り添った対応ができる点は大きなメリットといえます。一方で、全体の年齢層が上がってきている点は課題です。経営上、多くの人材を新規採用することは難しく、限られた人員で支援の質を維持・向上させる工夫が求められます。</p>	<p>短時間勤務やボランティアの受け入れを検討し、若い世代が関わりやすい環境を整えることが挙げられます。また、研修や交流の機会を設けることで、既存スタッフが新しい遊びや活動を学び、支援に活かせるようにすることも有効と考えられます。</p>